

閲覧ニュース

24号

1979.12

年未年始の開館時間について

12月15日(土)まで 平日: 9時~6時
(土曜日は1時まで)
12月17日(月)~12月25日(火)
9時~5時
12月26日(水)~1月5日(土) 閉館
1月7日(月)~ 平日: 9時~6時
(土曜日は1時まで)

冬休み長期貸出について

期間: 12月10日(月)から
1月10日(木)まで
冊数: 1人5冊まで

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
★ 読書感想文コンクール ★
★ 審 査 の 結 果 ★
★ かねてより皆様にご案内しておりましたように、教養部の先生方から推薦された図書を読んでその感想文を募っていましたが、10月末にて締切りました。
★ 読書週間をはさんで11月上旬、図書館長並びに運営委員の先生がたによる選考の結果、入選は、薬学科1年の内田公子さんに決定しました。
★ 11月20日、昼休み、教養部長、館長、運営委員の諸先生がたの列席のもと、入選者の内田さんには賞品が手渡され授賞式はなごやかなうちに終了致しました。
★ 入選作品は次のページに掲載しまして発表にかえさせていただきます。
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

二次資料コーナーを設置しました

詳しくは、係員におたずね下さい。

二次資料とは.....

研究書、入門書、文学書、歴史書など、専門のいかににかかわらず最初から最後まで読みとおし、その図書より直接、知識や情報を得る資料を一次資料と総称するなら、それらの資料に到達するまでの手引となる一つの資料類を二次資料と呼びます。たとえば、各大学図書館の蔵書目録とか雑誌の所在目録、また出版社の出版目録やリスト、書誌、索引、目録のグループを

二次資料と言います。日頃、利用者の皆さんが最も使いなれているものに図書館の所蔵目録があります。これは、ほとんどの場合、カード目録でたいがいこの図書館にもあります。ここで言う二次資料は、図書又は雑誌の形態をとった冊子体式のもので、二次資料を一言するならば“本を探す本”、専門用語でBibliography、図書館ではTool(本を探す道具の意味)などと呼ぶこともあります。

『クマのプーさん』

小 野 健 一（物理）

プーが私の家に登場したのは長男が小学生だった頃だから、かれこれ20年ほど前になるだろうか。以来『クマのプーさん』は長男、長女、次女、次男と読み継がれ、「何とか為に断つ」の言葉通り、背表紙は取れ、とじ紐は切れ、惨憺たる状態で今に到っている。あんまり非道いので一冊新しく求め、古いのは重要文化財の禁帯出図書、新しいのが貸出し用ということにした。岩波の少年文庫も最近は箱がないので、長男と合作でボール紙の箱を作り、フィレンツェあたりのものかと思うが白地に金で百合の紋章を印刷した包み紙を貼ったら、立派になり過ぎて又惜しくなり、本当の貸出し用をもう一冊買おうか、などとわけのわからぬことを言っている。

作者のA・A・ミルンには生涯に唯一冊だけ書いた『黄色い部屋の秘密』という推理小説があって、そちらの方は私も読んだことがあるが、プーの方は極く最近まで読んだことがなかった。

読書感想文入選作品

「ソ連の社会縮図を見てーガン病棟ー」

薬学科1年 内田 公子

暑い夏の夜、歴史書とこの2冊の『ガン病棟』の本を手にし、1955年に心を選び、時を過ごすことのできた私は、世界の一面を見た感激と、社会への目の向け方の変化を感じずにはいられないのです。大学生活の中でこそ、若い活力があるからこそ味わえるような読書への意欲を持つことができたことを、今うれしく思います。

ソ連のそして世界の作家であるソルジェニツィン。自らの戦争、流刑という体験を基に、圧迫を受けながらも、本の発表を禁止されながら

私がプーとお近づきになったのは数年前、小さな手術で十日ばかり入院した時のことである。まだ小学生だった末っ子の次男が「これを持っておいで」と貸して呉れたのが『クマのプーさん』と『プー横丁にたった家』で、これは実に楽しい思い出になる読書であった。

プーについてはあらためて紹介するまでもあるまい。子供たちは皆プーのファンなのだが、中でも次男が熱心で、全文を殆ど暗記しており、誰かが曖昧な引用をすると、たちまちディテールを訂正される。その次男のおともだちの上條君という子が家に来たときのことである。居間の隣りにある洗面所で何かをしていた長女が居間の私どもに向かって何かを言った。すると上條君が「おや、僕なんにもいわないのに声が出たよ」とまるでプーのようなことを言うので大笑いになった。「プーさんというのは、あれでリアリズムだったんだねえ」と上條君のこのエピソードはいまだに食卓の話題になっている。

も、人々にソビエト社会の縮図、人間像の絡み合いを伝えようと、命を賭けてきたのだな、ということが文字を追う私にも伝わってくる内容でした。その精神は、ノーベル文学賞の受賞という形で評価されましたが、賞を手にする以上に著者は、1人でも多くの人がこの本に目を通すことを願っていたのではないだろうか、とふと私は思いました。

そんな気持ちを抱き、ページを進めて行った私の心に、ルサノフの姿、心境の変化は

焼き付いている。共産党指導者であり、第二次大戦に対し絶対不敗の国を築く為に国民の力を絞り出させ、又大粛清を繰り返し、個人崇拜として神以上のものに崇め奉られたスターリンを心から愛したルサノフ。小官僚として当然の姿であり考え方であろうが、ひどい身分差別の意識を持っていることに對し、腹立たしさを覚えた。又、追放者としてのコストグロートフの姿。民主主義を信奉し人々に植え付けようとしたばかりに、多くの苦勞を背負わされた人である。

この2つの対極する人間像を中心に多くの人が、様々な階級から脱け出てきて、死を脳裏に刻み込みながらも生きていく日々が写し出されている話でした。ルサノフへの批判やコストグロートフへの同情の念など様々な感情を抱いたが、それらを述べることは、ソ連の歴史ひいてはスターリンや共産黨に対する考えを論ずることと言い表わせると思う。

スターリンの死、大粛清の指導者ベリヤの処刑、スターリンの後継者マルコフの辭職、そして1年後の第20回黨大会でレーニンへ帰れと叫ばれ、独裁政治の誤りが明らかにされつつあったソ連。この国民の自由への願望が、文化人に共産黨批判という動きをもたらし、『雪どけ』運動が進んでいった。この時、弾圧を受けても決して『結氷』しなかったこの雪は、国民のスターリンに対する怒りだったと思う。

この癌病棟の人の多くが、スターリンに批判を覚えたのと同じく、私も多くの反発を感じ、戦争、粛清の苦しみによる悲痛な叫びが心に伝わってきた。独ソ戦で人・物両面に於いて打撃を受け、特に人間の魂には永遠にいけない戦争の傷跡が刻み込まれたというのに、それをいやすべく暖かい手をさしのべるところか、さらに軍事・經濟力強化を国民に要求し、全てを独占しようとした。常に密告を恐れ、ベリヤ警察に脅えていなければならないという仕組みは、人

間の心を引き裂いたと共に、結局は政治を墮落させてしまったと思う。罪のない人までも粛清し恐怖政治、独裁政治を押し進めて行ったスターリンを愛し、『個人崇拜』する人でなければ、黨や政府に立ち入れず、国民は生きていながら何ら人間としての行動も考えも許されなかった。そんな時代の中で人々は何にすがりついて生きていたのだろうか。人間性とは何だったのだろうか。疑問と不安が心を掠めた。求めようとしても決して得られない心と心の触れ合いに人々は、どんなに飢えていただろう。互いに信じ合うこともできず、疑うことを身に付けていた人に比べ、今の私は幸せを感じずにはいられない。多少の不満や拘束があっても、両親といわれ、多くの人と自由に語り合える私は、ずっと人間らしいと思う。癌という病気に冒され、死の恐怖に立った時、人は必ず自分の生涯を振り返るだろう。その時、この時代に生きた人ほど様々な感情が沸き立ってくることは他にないであろう。それほど意味深く、人々に重大な影響を与えた転換期だと言えると思う。

私が、このソ連社会の縮図の中に位置していたらどんな姿でいただろうか。今だから言えることだとは思いますが、追放の身であろうと、官僚の身であろうと、人間の自由・精神の解放を守ることが、人間に課せられた任務であると思うし、しなければいけないことだと思う。自由・平等が許されている現代に生きる私達は、その解放感を喜び、自分勝手に進んでいくのではなく、できる限り有意義に時を過ごすべきだと思う。又、悔いなく生きる為にこの若い力を何か一つの目的に向かい発散させ、その根源から探り当てようとする努力を惜しむべきではないと思う。歴史が過去の人々に与えた痛手は大きいですが、その事実を知った今、もう一度自分自身を振り返り、前進していくことが大切であるということを、ソルジェニツィンは、私に語りかけてくれた。

新 書 (1979.7月～11月分)

〈中公新書〉

- 「イソップ寓話—その伝承と変容—」
小堀桂一郎著 中公新書 523
- 「加賀騒動」若林喜三郎著 " 528
- 「大久保一翁—最後の幕臣—」
松岡英夫著 " 536
- 「大帆船時代—快速帆船クリッパー物語—」
杉浦昭典著 " 542
- 「天神祭—大阪の祭礼—」米山俊直著 " 543
- 「力士を診る」林盈六著 " 544
- 「資源からの発想—新しい自然利用
の技術—」加藤 迫著 " 546
- 「空とぶカメラマン—私の仕事史—」
山田照夫著 " 547
- 「残照のヤルン・カン」上田 豊著 " 548
- 「日本の南洋史観」矢野暢著 " 549
- 「明治維新の遺産」
ナジタ・テツオ著 坂野潤治訳 " 551
- 「ユーゴスラヴィア—チトー以後—」
加藤雅彦著 " 552
- 「サバ紀行—その人間的記録—」
吉川公雄著 " 553
- 「京の芸能—王朝から維新まで—」
守屋 毅著 " 555

〈岩波新書〉

- 「物理学とは何だろうか 上」
朝永振一郎著 岩波新書 85
- 「東西書肆街考」脇村義太郎著 " 87
- 「ニュートン」島尾永康著 " 88
- 「茶の文化史」村井康彦著 " 89
- 「世直し」佐々木潤之介著 " 90
- 「芭蕉の恋句」東 明雅著 " 91
- 「火」熊谷直一郎著 " 92
- 「コロンブス」増田義郎著 " 93
- 「哺乳類」小原秀雄著 " 94
- 「比較のなかの日本国憲法」
樋口陽一著 " 95
- 「映像の演出」吉村公三郎 岩波新書 96
- 「神の民俗誌」宮田 登著 " 97

- 「ある被差別部落の歴史—和泉国
南王子村—」盛田嘉徳著 " 98
- 「日本語と女」寿岳章子著 " 99
- 「法とは何か」渡辺洋三著 " 100
- 「足の話」近藤四郎著 " 101

〈講談社現代新書〉

- 「知的創造のヒント」
外山滋比古著 現代新書 490
- 「間」の日本文化 剣持武彦著 " 495
- 「イギリス人と日本人」
P. Milward 著 別宮貞徳著 " 496
- 「日本語の成立」安本美典著 " 506
- 「学問の世界 碩学に聞く 上」
加藤秀俊 小松左京共著 " 515
- 「日本経済を見る目—国際経済の
視点から—」島野卓爾著 " 530
- 「聞き上手・話し上手—市民のた
めの講座—」扇谷正造著 " 535
- 「アメリカン・ウーマン」吉川裕子著 " 537
- 「人間関係の心理学」早坂泰次郎著 " 539
- 「翻訳読本—初心者のための八章—」
別宮貞徳著 " 540
- 「ブラック・ボックス的人間論」
西川泰夫著 " 541
- 「なぜ外国語を学ぶか」田辺 保著 " 542
- 「アメリカン・インディアン—その
生活と文化—」青木晴夫著 " 543
- 「生きものの世界」小原秀雄著 " 544
- 「日本語の故郷を探る—モンゴル
語圏から—」小沢重男著 " 545
- 「遊牧民族の知恵—トルコの諺—」
大島直政著 " 546
- 「イタリア人」山崎 功著 " 547
- 「活断層—地震の謎をさぐる」金子史郎著 548
- 「西欧文化の条件—中世の復権—」
井上泰男著 " 549
- 「本とは何か—豊かな読書生活の
ために—」小林一博著 " 558
- 「プラハの憂鬱—素顔の東ヨーロッパ—」
左能典代著 " 559